

「カンバセーション・パートナー・プログラム」が参加学生に与えた影響 —卒業生へのアンケート調査を通して—

上田 美紀・渡辺 民江

1 はじめに

大学の国際化が注目される中、各大学においては積極的に海外の大学と提携を結び、交流を進めている。本学においても、海外提携校との交流を行っており、日本語教育センターでは、平成5年より20年間に渡り海外提携校からの交換留学生を対象とした日本語教育を行ってきている。提携校数が増加するとともに、そのニーズに合わせ、期間も3ヶ月、6ヶ月、1年とさまざまなになり、クラスレベルも初級から上級まで幅が広がってきている。さらに、学習動機もポップカルチャーへの興味から将来の研究や就職に結びつけたい等まで、多様化している。日本語教育センターでは、これらを意識した科目やレベル設定を行い、きめ細かい日本語教育を目指している。

それに加え、短い留学期間により効率的に日本語力を向上させ、また日本をより深く理解する機会を与える方法として、教室内での授業のみならず、教室外での日本人との直接接点場面の提供をプログラムに組み込んでいる。平成5年日本語教育センター（当時の名称は留学生別科）設置と共に「カンバセーション・パートナー・プログラム（以下「カンバセ」）」をスタートさせ、以後改善を重ねつつ継続してきている。

「カンバセ」の第一義的な目的は、留学生の日本語会話力の向上、日本人との人的ネットワークの構築、日本文化・社会の理解促進、留学生の心的サポート等である。しかしながら、長年の活動の中で第二義的に日本人学生への影響も大きいことがわかり、検証を行ってきた。本研究では、卒業後の「カンバセ」経験者への調査を行い、その影響について検証した。

2 「カンバセ」の概要

「カンバセ」とは、本学日本語教育センターで学んでいる留学生に、日本人学生を会話のパートナーとして紹介するプログラムである。日本人学生の参加者は全学部学科生を対象とし、各学期の始めに希望者を募る。日本人学生はボランティアであり、授業科目との連携はしていない。留学生1名と日本人学生2名のグループを作り、紹介し、各グループには最低週に1回会い、日本語で会話することを課している。各グループの活動は学生の自主性に任せているが、日本人学生

には、会うたびに日本語教育センターにメールで簡単な報告を提出させている。また、オリエンテーション時には、留学生の背景に配慮し発言や行動をすること、お互いの学習の妨げになる行動は慎むこと、誤解や問題が生じた場合は速やかに報告すること等を指導している。

日本語教育センターは活動のシステムを作り、通常は黒子のような立場であるが、何らかの問題が起こった際には、サポートに入ることでできる態勢をとっている。各学期の終了時には、「カンバセ」参加者全員での懇親会を行い、さらに親睦を深めている。

3 先行研究

「カンバセ」の効果検証に関しては、活動そのものについての検証（宮副他2003、渡辺他2004）、および「カンバセ」参加者（日本人学生）の異文化対処能力の変化についての検証（上田他2011）等を行った。

前者の検証では、「カンバセ」に参加した留学生、日本人学生、担当日本語教員のアンケート・インタビュー調査の結果をまとめた。その結果、留学生の日本語習得及び異文化理解を促すという高い評価は見られたものの、活動状況の把握不足・教員への「カンバセ」効果の情報不足・日本人学生へのオリエンテーション不足等、システム的な問題点も指摘された。これらの点に関しては、改善を重ねてきている。後者の検証では、日本人学生の異文化対処能力の変化についてケーススタディーを行い、異文化対処能力の4つの要素（山岸1995）に基づき評価し、その具体的変化を示した。その結果、1）「カルチャラル・アウェアネス」においては、相手国の文化理解やそれに関する関心の点で気づきがあったことがわかった。2）「自己調整能力」に関しては、「柔軟性（判断しないこと）」および「オープンネス（受容）」の領域で意識が高まったことを示した。3）「状況調整能力」に関しては、「対人関係を確立し、維持する能力」に変化があったことが窺えた。4）「感受性」に関しては、それに基づいた「相手を気遣い尊敬し配慮する発言」が多く見られた。以上のことから、本ケースの日本人学生は、異文化対処能力の4つの要素に関して自らの変化に気付いていることが明らかとなった。

しかし、これは「カンバセ」終了直後のケーススタディーであり、その後の生活にどのような影響をもたらしたのかの検証は行われていない。そこで、本稿では「カンバセ」を経験した卒業生を調査し、具体的な「カンバセ」のその後の影響を検証した。

4 目的

本研究の目的は、卒業後、参加者が「カンバセ」経験をどう捉えているか、またその後の行動へ具体的にどのような影響を及ぼしているかを検証することである。

5 調査方法

5.1 対象

「カンバセ」に参加した経験のある卒業生の中から無作為に30名を選び、そのうち連絡可能な12名（男性9名、女性3名）を今回の調査対象とした。9人が社会人（日本語教師1名を含む）、1名が就職活動中、1名がアルバイト、1名が留学中である。

5.2 時期

平成24年2月～4月

5.3 方法

質問紙によるアンケート調査を行った。

質問事項は、1)「カンバセ」経験の振り返り、2)自分自身の変化、3)現在への影響、の3点である。質問紙の作成には、文部科学省中央教育審議会『21世紀を展望した我が国の教育のあり方について』（平成8年）をもとに文部科学省が作成した『国際理解教育：国際化対応への3つの視点』1)異文化と共生できる資質や能力、2)コミュニケーション能力、3)自己の確立、を参考とした。

6 結果

6.1 「カンバセ」経験の振り返り

「カンバセ」参加中は、12名全員が週1回以上留学生と会っており、9名が学外でも活動したと答えた。印象に残っていることについては、互いの部屋で自国の料理を作り、食べた経験や、留学生からの質問に答えられず困った経験が挙げられた。12名中7名が、パートナーを「友人・親友」と捉えていることから、対等な友人関係で交流していたことが窺える。また、留学生からさまざまなことを学び、得ることが多い経験であったと振り返るとともに、一方で、留学生の日本体験を有意義なものにすることが自らの役割であると感じていたことがわかった。以下、印象に残っていることについてのコメントを挙げる。

- ・下宿で飲みながら話した。一緒にたこ焼きを作って食べた。
- ・誕生日にケーキをもらった。
- ・寮で一緒に韓国料理を作って食べた。
- ・お互いの国のことを話した。
- ・日に日に留学生の日本語力が向上し、最後には最初に会った人とは全く違っていた。
- ・懇親会が楽しかった。
- ・質問されて答えられないことがあった。
- ・最初のうちは、何を話していいかわからず、困った。
- ・言葉より文化的な質問が多かった。

6.2 自分自身の変化

表1 「自分自身の変化」についての回答結果

	はい	いいえ	どちらとも言えない
1 パートナーの国や文化に興味を持った。	11	1	0
2 視野が広がった。	11	0	1
3 異文化を理解できるようになった。	10	0	2
4 異文化を尊重できるようになった。	12	0	0
5 異文化を持った人とともに生きる能力が高まった。	8	0	4
6 外国人に対するイメージが変わった。	4	2	5
7 日本人としての自覚が高まった。	8	1	3
8 日本についてもっと知らなければならなかったと感じた。	10	1	1
9 自分自身を客観的に見る機会になった。	8	1	3
10 外国語を身につけることが必要だと感じた。	10	1	1
11 コミュニケーション能力が高まった。	8	1	2

「カンバセ」参加当時、異文化を理解し、尊重できるようになり、視野が広がったと感じていることがわかった。また、そのことが異文化への対応力の向上に繋がっている様子が窺える。留学生と交流することで、日本人としてのアイデンティティが意識化され、自文化に対する知識のなさ気づいている。また、交流の際のさまざまな気づきから、外国語の必要性をはじめ、コミュニケーション能力の重要性について自覚し、具体的な方策を講じてパートナーとの関係を築いていったと振り返っている。

以下、調査協力者から得られた各質問に対するコメントを挙げる。

表1の1について

- ・留学に直結した。
- ・中国語を学ぶために、授業を履修した。
- ・相手の国の料理を食べに行った。
- ・相手の食文化について、図書館で調べた。
- ・料理の作り方を聞いて、自分で作ってみた。
- ・相手の国の行事について調べた。
- ・韓国語で名前が書けるように、覚えた。
- ・相手の国の音楽を聞いたり、映画を見たりした。

表1の6について

- ・当初抱いていたほど、ギャップは感じなかった。
- ・メディアに植え付けられた〇〇人のイメージが変わった。
- ・思ったよりお金を持っていた。
- ・日本人より日本に詳しい。日本人より大人である。
- ・思いやりや礼儀は返してくれるもので、自分たちとなんら変わりはないと思えた。
- ・もともと外国人は根本的に違うと思っていたが、表面的には違っても、根本は同じだと思った。

表1の9について

- ・行動力があるなと感じ、「見習いたい」と思った。
- ・日本の歴史・文化について聞かれ、答えられないのを恥ずかしいと思った。
- ・「勉強しなければ」と思った。
- ・パートナーの目的意識の高さに、「自分はなんて小さいんだろう」と感じた。
- ・メディアと実際の違いに触れ、メディアの自分への影響を知った。

表1の11について

- ・相手が何を言いたいのか先読みするようになった。
- ・わかりやすく話すようにした。
- ・相手のわずかなアクションも見逃さないようにした。
- ・人見知りだったが、「カンバセ」で多くの出会いがあり、自分から話すようになった。
- ・「英語以外も必要だな」と思った。
- ・話の切り出し方や、引き出し方に気を遣った。
- ・コミュニケーション能力をつけようとした。
- ・「勉強しただけ話せるようになる」と思った。
- ・対人スキルを意識した。
- ・相手の日本語力が高かったので、特にコミュニケーション能力について考えなかったが、興味はもった。

6.3 現在への影響

調査協力者のうち、現在、外国人に接する機会がある人は12名中8名であった。また、「カンバセ」の経験が活かされていると感じている人は12名中8名で、どちらとも言えないと答えた人は2名であった。「カンバセ」の経験が、外国人と接し異文化体験をする第一歩であったと振り返る人が多い。今現在、身の回りの外国人に偏見・先入観を持たず、自然に接している様子が窺える。また、「カンバセ」の経験がコミュニケーション能力や行動力に変化をもたらしたようである。今でも外国人と接する機会を持ち、また卒業後もパートナーと連絡を取り合っている人もいようである。

以下、具体的なコメントを挙げる。

今、「カンバセ」の経験が活かされている具体例について

- ・先入観は崩れる、深く接してみないとわからないと理解している。
- ・海外に関心を持つと同時に、日本文化・日本語にも興味を持っている。
- ・偏見なく接することができる。
- ・外国人に接する第一歩となった。
- ・大学院時代に留学生からさまざまな相談を受け、頼りにされた。
- ・メールやフェイスブックで今も繋がっていて、大きな財産であると感じる。

「カンバセ」の経験が、あなたに及ぼした影響について

- ・国際観の基礎を築いた。
- ・留学生の行動力を見て、すばらしいと思い、悔いのない大学生活を送ろうと思い身を引き締めた。
- ・「カンバセ」がなければ外国人と話すことはなかった。
- ・外国に目を向けたきっかけであり、異文化経験の第一歩であった。
- ・適応力が高まった。
- ・先入観がなくなった。
- ・外国へのあこがれと共に、日本・日本文化に関心を持った。
- ・中国という高いハードルを低くしてくれた。
- ・人生を変えた。
- ・日本について知らないことの多さに気づかせてくれた。
- ・世話好きになり、今の仕事に繋がっている。
- ・適応力がつき、偏った考え方にしに、物怖じせず話しかけることができるようになった。

- ・伝えようとするのが大切で、間違えてもいいと思うようになった。
- ・会話一つ一つに気をつけるようになった。
- ・行動力が上がった。

7 まとめ

調査の結果から、日本語学習者に日本人と接触する場面を提供する「カンバセ」活動が、第二義的に日本人の異文化理解に繋がっていることがわかった。調査協力者は、「カンバセ」が行動力・国際感覚を身につけ、外国人と接する第一歩の経験となったとし、また、留学生から刺激を受け、自らを省みたことで、その後の行動に変化をもたらしたと振り返っている。このように、「カンバセ」が日本人学生に与えている影響は多大であると言える。

今後も「カンバセ」を持続させつつ、より多くのデータを集め、具体的な内容分析をすることにより、その

効果・影響を明らかにしていきたい。

参考文献

- 上田美紀他（2011）「カンバセーション・パートナー・プログラム参加者の異文化対処能力の変化」異文化間教育学会第32回大会
- 宮副ウォン裕子他（2003）「カンバセーション・パートナー・プログラムの参加者は何を学びあったかー中部大学生と香港理工大学生の双方向的学习の調査と分析ー」『留学生教育』第8号、pp.201-220
- 山岸みどり（1995）「異文化間能力とその育成」渡辺文夫編著、『異文化接触の心理学』、川島書店、pp.209-223
- 渡辺民江他（2004）「カンバセーション・パートナー活動の効果と問題点」『留学生教育』第9号、pp157-167

〔教授 日本語教育センター 上田 美紀〕
〔准教授 日本語教育センター 渡辺 民江〕